

---

# ペア・プレイ

中村 童秋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ペア・プレイ

### 【Nコード】

N8404Y

### 【作者名】

中村 童秋

### 【あらすじ】

Eエブリスタ、ミクシイ、フォレストノベルズ、魔法のいらんどで公開中

同一内容、文章も同じです。

## プロローグ

### プロローグ

どんなに望んでも、叶えられない夢がある。強く想い。努力したところで、叶うとは限らない。だが、前に進まないとも何も始まらない。それも、事実である。俺のように、生半可な考えでは、何も始まらない。

そんな事は、分かっていた。でも、こつこつに見放されては、やる気も失せてしまう。なんて不幸なのか、俺自身嫌になってしまった。

ふてくされて、日々をいい加減に生きていたが、そんな俺にもチャンスがやってきた。

そう、“ペア・プレイ”という名の最大のチャンスがやってきたのだ。

大学を卒業して、一応それなりの会社に就職した。それまでは、順調だったのに。就職して僅か三ヶ月、会社が倒産してしまう。取りあえず、コンビニのアルバイトを始めたが、それがいけなかった。自分の不運を妬み、卑屈な日々を送るようになる。何もかもが嫌になって、ダラダラと生活していた。

田舎に帰って、適当に就職して、適当に結婚して、適当に生きていこうか。そう思うようになった。

アルバイトにすら、行くのが嫌になった夜の事。一通のEメールが届く、見出しはこうだった。

“あなたの夢、叶えてみませんか？”

明らかに怪しい。どう考えても、怪しい。そう思ったが、俺はそのメールに書かれていた番号に電話した。非通知でかけたのに、相手は俺の電話番号を知っていた。

名前は名乗ったが、住所まで知っていたのである。驚いた。だが、更に驚いたのは、俺が選ばれたという事だった。

選ばれたと言っても、全国で一人いるのだが……。ともかく、  
“ペア・プレイの予選会に参加するか？”と、訊かれて、“参加する”と、答えた。

サイトにアクセスして、問題に挑戦するようにとわれた。千問の問題に挑戦した。さほど難しい問題では無かったが、恐らくは、速さを競うものだったと思う。

問題に挑戦した翌日、俺の元に一通の手紙が届く。ペア・プレイへの招待状だった。天国か、地獄か、俺は手紙の指定した場所へ赴いた。

其処は、建設中のビルだった。不可解に想いながらも、入り口で作業中の人に招待状を見せて訊いてみる事にした。

忙しく働いているので、多少、気が引けたのだが、近付いた俺に  
気付くと

「斗神 誠治さんですね？」

と、訊かれた。

「ハイそうです……」

そう答えると

「お待ちしておりました。こちらにどうぞ」

と、地下の大きなホールへ案内された。

長い時間歩いた。エレベーターにも乗った。一体此処は何処なのか、見当もつかない。

ホールには大勢の男女が居て、ガヤガヤと話をしていた。話の輪に入れないまま、突っ立っていると、入り口が一つで無い事に気付く。どうやら、場所を特定されない為に、幾つかの入り口を用意しているようだ。

全く、手が込んでいる。一体、目的は何なんだろう。しばらくして、ホール内が暗転すると

「皆様、大変お待たせ致しました。第二次予選会を始めたいと思います」

正面にある大画面テレビに、顔の見えない男が映し出されて、そう言った。ホール内が静まり返る。

「これより、男女ペアになって戴き、問題にチャレンジしてもらい

ます。正解者が、六組の男女、十二人になったところで、締め切りとさせていただきます。要するに、早い者勝ちという事です」

顔は見えないが、明らかに笑っている。こちらをバカにするような、イヤミタツプリの笑い方である。

「何が目的だ！ 説明しろ！」

誰かが叫ぶ。

「説明は致します。ただ、それは、予選を通過した十二人のみに行います。落選者には、説明致しませんので悪しからず。尚、一つご忠告しておきます。ペアになる相手は慎重にお選び下さい。この後の対戦に大きく影響しますので、此処に居る方々は、優秀ではありませんが、ピンから切りまでいらっしやいますから、では、二次予選を始めます」

いよいよ始まった。この俺の夢を叶える為のペア・プレイが……。

## 第一章 選ばれた六組 第一節 第二次予選会

「では、二次予選について、ご説明します」

そう言うと中央の床が開いて、五個の円形の台が現れた。その台には、何か文字や数字が書かれてある。

「この五個の台の内、一つだけが正解で、後は全て不正解となります。次のヒントを頼りに、正解の台の上に乗って下さい。但し、パトナーを見つけて申請を行ってからでないと、台に乗る事は出来ません。不正解者、正解者が出る度に、台の上の文字、数字共に変化しますので、お早めにお願ひします。尚、不正解だった場合には、その場で失格となりますので、注意するようにして下さい。では、第二次予選会スタートです」

テレビ画面に、ヒントが映し出された。

最大月 - 8、最小月 - 5

勤労感謝の日 - 11

年利最大 + 5

何の事か、皆目見当がつかない。台の上には、“十、五”、“T、千”、“万、実”、“合、一”、“R、三”と書かれてある。一体、どれが正解なのか？

誰もが、答えを考えている時だった。

「ヤバい！ 良いパートナーを見つけないと！」

誰かが叫ぶ。それと同時に、一斉に互いの学歴を確認する行動が始まった。最終学歴は、このホールに入った時に貰った胸のネームプレートに記載されている。

「ちょっと、見せて！」

ネームプレートを見られた。相手は、女子大だった。一流とは言えないが、まあまあ良い大学である。

申し分ない。そう思ったが

「大学……三流以下ね！ はい、ダメ！」

行ってしまった。そうか、相手だって選ぶ権利がある。俺の大学は、確かに三流以下だ。これでは、相手は見つかり難い。

ひとまず、問題の答えを考えてみる。ヒントからして、何らかの数字である事は伺いしれる。だとすると、あの文字と数字の組み合わせに、何の意味があるのだろうか。

分からない。どうすれば良い。

答えが分かれば、パートナーを見つけられるかもしれないのに……。

「最初の挑戦者だ！」

中央の台に、全員が注目する。如何にも、頭の良さそうなペア。



ネームプレートを見ると、 国立大と 国立女子大、超一流のペアである。

「こんな問題も解けないようなら、先に進むのは止めることね！  
どうせ、私たちには勝てないのだから」

「その通り、君たち落ちこぼれに、僕らを負かす力があるとは思えない」

ニヤリとバカにしたように笑い。二人は、“T、千”と書かれた台の上に乗った。

緊張が走る。本当に正解なのか？

「おめでとうございます。次のステージに進んでいただきます」  
乗った台ごと下へ降りて行く。正解だったという事は、“T、千”もヒントとなる……………そうか、分かったぞ！

答えが分かった。このホールの雰囲気と緊張感で、取り乱していたから頭がうまく回っていなかったけど、ヒントの答えは分かった。  
後は、パートナーを見つければいいだけだ！

「オオ！」

どよめきが起こった。二組目の正解ペアが出た。中年のオヤジと四十代位の女性。ギャンブラーと飲み屋のママといった感じだ。

ヤバイ！ 早くパートナーを見つけないと、答えが分かっている

も次に進まないという意味がない。

焦る気持ちの中、いろんな人に声を掛けたが、全て断られた。

「頼む！ 答えは分かっているんだ！」

そう叫んだ時、後ろから肩を叩かれた。

「本当に、答えが分かったんですか？」

ネームプレートを見ると、俺と同じ大学だった。多少不安だが、選んでいる余裕はない。

「ああ、だからペアになってくれ」

「良いけど、私も答えは分かっているんです。だから、本当に分かっているなら、答えを言って下さい」

他の人に聞かれてはマズいので、辺りを見回して、こっそり耳打ちした。

「なるほど……そういう事だったんですか？」

「なるほどって、答えは分かっていたんじゃない……まあ良いや！ 早く、ペア申請を……」

「悪いけど、私もうペア組んでるから」

彼女がそう言つと

「バカが、罨に掛かったか？」

と、言つて、男が現れる。

「答え分かつたから、行きましょう！ バイバイ、おバカさん」

そう言い残して、二人は正解の台の上に乗る。

「四組目の正解ペアです」

こちらを見て、バカにしたように笑う。騙された。騙された俺が悪いが、悔しい。何とかペアを探して、あいつらの鼻をあかしたい。だが、見つからない。

途方に暮れていると、シャツの袖を引っ張られた。見ると、女性が袖を引っ張っていた。

「何だよ？」

少々気味が悪かったが、俺の腕を引っ張るとペア申請場所に向かう。無言のまま、ペア申請を行った。

「はい、完了しました。回答権が得られました」  
そう言われた瞬間。

「五組目の正解ペアです。あと、一組で終わりです」  
急いで、台の方に向かう。台が再び上がって来ると

“4月、第2土曜日”、“5月、第三土曜日”、“7月、第4土曜日”、“8月、第二土曜日”、“12月、第三土曜日”と書かれて

いる。

何人かが、一斉に携帯を取り出す。しまった。一步遅れた。恐らくは、携帯を取り出した人は、答えが分かっている。

ダメだ！ 間に合わない！

此処で終わりか……悔しい。

ウワァ！ ペアの彼女が、俺の腕を取って、7月第4土曜日と書かれた台の上に乗った。

沈黙が辺りを包み込んだ。

「はい、最後の正解ペアです」

ため息が一斉に洩れた。

「以上で、第二次予選会を終わります。失格者の皆様は、記念品を持って速やかにお帰り下さい」

答えは簡単だった。数字の“2と3”、最大月31から8を引く、最小月28から5を引く、勤労感謝の日11月23日から月の11を引く、貸し金利18%に5を足す。全て、23である。一組目の答え、“Tと千”は、画数だった。占いの本で読んだのだが、相性を占う際には、アルファベットも画数がある。Tは画数2、千は画数3なのだ。

確認はしていないが、今年の7月の第4土曜日は、恐らくは23日なのだろう。

そう思いながら、彼女を見た。俺の視線に気付いて、ニコッと笑う。か、可愛い……惚れてしまいそうだ。

がっかりする人、俯く人、泣いている人、夢が叶わなかった悲しみ……その中を俺たちは、暗い地下へと降りて行く。その先に待っているのは、天国かまたはまた地獄なのであるか。

## 第一章 第二節 ルール

地下に到着して、暗い通路を通り突き当たりの部屋に入ると、五組のペアがくつろいでいた。

「アラ……最後のペアはお若いのね！」

ワイングラスを傾けながら、二番目に正解した飲み屋のママ風の女性が言った。

「おバカさんの割には、ギリギリセーフって感じね」

俺を騙した女が、笑う。怒りがこみ上げて来るのを感じた。殴りかけたい気分だ。女といえども、ここまでバカにされては、黙ってられない。

「フン！ バカはどっちだか？」

二番目の正解ペア、ギャンブラー風の男が言う。

「何だと！」

俺を騙した女のペアの男が言った。ギャンブラー風の男の胸ぐらを掴む。

「考えてもみる！ お前たちペアは、そいつを騙して此処に来た。お前たちペア以外は、実力で此処に来ているんだ！ どんな戦いかは知らないが、頭脳戦である事は間違いない。だとしたら、実力の無い貴様らが真っ先に落選する事は、目に見えている」

「ふざけんな！」

一触即発状態、止めに入ろうかと迷っている

「暴力行為は、即失格とします」

と、中央の扉が開いて、テレビ画面にあの男が映し出される。

「チツ！」

どうやら、一触即発状態は回避出来たようだ。

「まあ良いでしょう。これから、ルールとこのゲームの目的、リスクとリターンについて説明しよう」

「リスクだって、俺たちにリスクがあるのかよ！」

「当たり前です。どこの世界に、他人の夢をリスク無しで叶えてくれるお人好しが居るんですか」

ニヤリと笑うテレビ画面の男、そう言われてみればそうだ。夢を叶えられるというリターンがあるのだから、それ相応のリスクがあるって、当然だと思う。

「我々として、遊びでこんな大がかりな事やっているのではありません。あくまでも、お金儲けが目的です。このゲームは、所謂金持ちの方々の暇潰しだとお考え下さい」

「なんだそりゃ！ どういう事だ！」

“金持ちの暇潰し”……嫌な予感がする。もしかして、此処は地獄なのか？

「あなた方には、一人二億円の賭け金が賭けられています。敗者には、その内一億円を、借金として後に返済していただきます」

「い、一億だと！ そんな金払えるわけないだろう！」

「ご心配無用です。返済方法については、既に決定しています。あなた方に賭けた人物の元で、働いていただきます。ただし、返済する為の仕事は選べません。まあ、美しい女性が揃っているようなので、女性の方々は、大体的見当がつくと思います」

今度は、なんともイヤらしい笑い方、一体、俺に二億円を賭けたのは、何処の誰なんだろうか？

「皆様へのリターンは、賭け金総額二十四億円の内、賭けの勝者に八億円、私どもが八億円、優勝者一人につき四億円となります。そのお金で夢を叶えると良いでしょう」

四億あれば、一生遊んで暮らせる。俺の夢なんて、簡単に叶ってしまう。

「リスクとリターンが分かっていたところ、もう一度、ゲームへの参加意を問いたいと思いますが、参加を拒否される場合、速やかにご退場いただきます」

「……………」



全員が考え込む。四億円は魅力だが、一億円の借金はいただけない。ただ、返済方法が決まっているなら、後の生活には困らないという事になる。どうしたものか……。

「では、正解順にお聞きします。堂本 晶良さん、東野 朱美さんペア、いかがですか」

「決まっている。勝つのは私たちペアだ、参加する」

名前を初めて聞いた。ネームプレートには、名前の記載は無い。自信タツプリの二人には、適わないかもしれない。

「分かりました。お二人は、一流大学卒ですので、一流ペアと名付けましょう」

「では、次に……」

「訊くまでもねえ！ このまま帰ったところで、マトモな仕事がつているわけでもない。参加する」

四十代のママさん風の女性も、同意するかのように頷く。

「では、お二人は麻雀のプロなので、プロペアとします。お名前は、開城 正隆さんと内海 美弥乃さんです」

この二人、麻雀のプロ……と、いって表の麻雀ではなさそうである。

「では、三番目に、高田 真也さんと金井 纏さんどうですか？」

「確かに、リスクは大きい。だが、私の能力を分かっている会社には、ほとほと愛想が尽きた。私は、参加する」

「私は、ある方の秘書をしていましたが、自分の失敗を私になすりつけて、私を解雇しました。四億円あれば、充分に復讐出来ます。参加します」

「良いでしょう。システムエンジニアとキャリアウーマンのペアなので、キャリアペアとします」

この二組目、三組目も強敵のようだ。次は、あの二人だ……。

「次のお二人、坂本 薫さんと城島 則子さんのペアは……私としては、不参加の方が良いと思いますが、いかがですか？」

二人の顔が高揚する。特に、女の方は、バカにされるのが嫌いなようだ。

「ふざけないで！ 参加するに決まってるじゃない！」

「お、俺も参加する」

男の方は、勢いで参加するように見える。女の方は、意地を張っているようだ。

「そうですか……ルール説明に入ると、参加取り消しは出来ませんが、よろしいですか？」

生唾を呑み込み、頷く二人。プロペアの二人は、止めた方が良いと言いたげな表情だ。

「お二人は、……詐欺師ペアという事で」

テレビ画面に映っている男、嫌な奴かと思っただが、以外に良い奴かもしれない。

「では、五番目、多井 光秀さんと丸山 聖名子さんペアは、いかがですか？」

中年の男女のペアだ。どことなく、知性のようなものを感じる。

「私の発想力を持ってすれば、解けない謎など無い！」

「私の推理力が、全てを解き明かすでしょう」

「ご参加されるという事ですね！ では、お二人は、推理作家志望ですので、作家ペアといたします」

一流大学ペア、裏の世界で生きる本物の勝負師ペア、現役社会で活躍するキャリアペア、発想力に優れている作家ペア、詐欺師ペアはどうでも良い。

詐欺師ペア以外の強敵四組に、この子と二人で勝てるのだろうか？

「では、最後に、斗神 誠治さんと日向井 直美さんいかがですか？」

どうしよう……決心がつかない。悩む俺の手を、ペアの彼女が握る。彼女を見ると、目を閉じながらゆっくりと頷いた。まるで、私とあなたなら勝てる。そう言っているようだ。

「参加します！」

胸を張って言った。何故だか勝てるような気持ちになった。

「分かりました。お二人は、特に特長が無いので、ダークホースペアとします」

「ダークホースだって、大穴って事よね！」

吹き出しながら、詐欺師女が言った。悔しさを滲ませながら、言い返そうとしたとき

「フフツ……詐欺師より、マシだと思っけど」

と、プロペアの女性が言った。

詐欺師女が睨むが、プロペアの女性は気にしない。詐欺師男は、プロペアの女性の色気にボーっとしている。

「ちょっと！ 何見とれてるのよ！」

「い、イヤ……別に……」

詐欺師女に脇をつつかれて、頭をかく詐欺師男。

「それでは、ルールについて説明します。一度しか説明しませんので、よく聞いて下さい」

全員がテレビ画面に集中する。

「一時間後に、ゲームを開始したいと思います。それぞれの部屋に入っていただき、ゲーム開始五分前の合図と共に、ゲームルームに入って下さい」

「ゲームルーム？」

「そうです。各部屋に設置されています」

各ペアが、顔を見合わせる。多分、同じ疑問を抱いているのだろう。

「ペア・プレイって言うんだから、ペアで戦うんじゃないのか？」

プロペアの男の方が訊いた。

「ペア戦ではありませんが、話し合いや作戦会議は出来ません。ここから、この十二人が顔を合わせる事は、一切ありませんので、ご承知おき下さい。各ペアは、実戦でのみ協力するという事になります」

「何だって、そ、そんな……」

愕然としたのは、詐欺師ペアの二人である。恐らく、クイズ形式の戦いを予想して、また、詐欺の類を行おうとしたのだろう。その当てが外れたのだ。

「だから、詐欺師ペアの二人には、不参加をお勧めしたのです。互いにペアになったのは、何かの縁と思います。参考までに、互いに信じ合わないと、この戦い勝ち抜けないと思います」

沈黙が辺りを包む。誰もが予想していなかった展開だ。ペアを組んだ相手を信じきる。それが出来ないと言勝ち抜けない。ペア戦でありながら、孤独な戦いを強いられる事になる。

「リーグ方式の総当たり戦、回戦ごとに最下位のペアが脱落します。五回戦行い、最後に残ったペアが優勝となります。各回戦のポイントは、次の回戦に持ち越されるので、なるべく上の順位で通過する事が有利だと思います」

「なるほど、まあ、一回戦の脱落ペアは、決まったようなもんだな……」

冷やかな目つきで、詐欺師ペアを見るキャリアペアの男。

「それでは、部屋に入ってくださいませ。部屋に入ると終了するまで出られません。生活に必要な物は全て揃っています。ゲームの説明はそのつど行いますが、基本になるゲームの説明書が用意してあります。読んでみると良いでしょう。では、優勝出来る事を祈っています」

そう言い残して、テレビ画面が暗くなると、壁に十二の扉が現れる。俺の名前が書かれた扉に立ち、覚悟を決めて、扉の奥に入っていく。

その先に待っている戦いを乗り越えて、俺の夢を掴む為に……。

## 第一章 第三節 ゲーム開始前

部屋に入ったが、どうしたモノなのか。ペアの相手と連絡が取れないのでは、どうする事も出来ない。

中央の丸いテーブルの上に、ゲームに関する説明書が置いてある。一回戦の説明書は……え、ま、マジヤンだって！

俺は、大学に通っていた頃、友達とよく卓を囲んだから大丈夫だが、彼女は、ルールが分かるんだろうか。

どうしよう……心配でたまらない。ルールも分からないのでは、勝機もへったくれもない。最初から、負けが決まっているようなものだ。

そつだ。携帯が有る。

でも、番号が分からない。分かったところで、恐らくだが彼女は、言葉を話せない。

八方塞がりである。クツソー……何とかならないのか……。携帯を取り出してみたが……ん？ 何だ、この紙……いつの間にポケッタに……こ、これは、携帯のアドレス、メールなら話す必要はない。

しかし、いつの間に……。待てよ、連絡を取り合って良いのだろうか？

ルール違反で、失格になったら元も子もない。

「オイ、小僧！」

な、何だ？ どこから、声が聞こえてくるんだ？

「小僧！ 此処だ！」

上の方から聞こえてくる。上を見ると、排気口がある。

オヤ？ 排気口の中に誰か居るぞ！

「小僧、ここを開ける！ こっちからじゃ開かねーんだよ！」

誰かと思ったら、開城さんだった。どうしてこんな所に居るんだろう。開けると言われても、どうしたら……え？ この入り口、開閉ボタンがついている。

入り口を開けると、開城さんが排気口から出てくる。

「フウーツ……トロイ小僧だ……全く」

ブツブツ文句を言っているけど、こんな所に来て大丈夫なのか。

「大丈夫だ！ 心配するな！」

開城さんが、俺を見つめて言った。まるで、俺の考えている事が分かっているように。

「分かるさ！ 分かんなきや、裏のマージャンで生きられねえ！」

そうか、心を読んだワケじゃない。表情を読んだんだ。



「フッ、トロイ割には、頭は回るようだな！」

「どうして、此処に来たんだ？」

「来たくて、来たわけじゃねえ。部屋の中を調べていたら、偶然ボタンを見つけて、もしかしたらと思って入り込んでみたが、どうやら、男の部屋にしか繋がっていいねえみたいだ」

「他の部屋にも行ったのか？」

「ああ、他の連中には、声はかけてねえが、此処まで来て息が苦しくなっただ、お前に声をかけたってわけだ」

「用が無いなら帰ってくれ！ もし……」

「ならねえから、安心しな！」

また、表情を読まれたのか。でも、ルール違反で失格になったら、元も子もない。

「よく考えてみな、開閉ボタンがあったって事は、排気口に入っても良いって事だ。つまりは、このペア・プレイってゲームは、ゲームをプレイしている時以外も、戦いの中に居るって事じゃねえのか？ まあ、平たく言えば、戦略ってやつだな」

入って良いという解釈が、本当に間違いないのだろうか。不安が湧き上がってくる。

「全く、心配症なヤツだ。ルール説明の時に、コンタクトをとった

りしたら失格と、一言でも言ったか？」

そう言われれば、聞いていない。失格になるとは、言っていないかった。それどころか、コンタクトを取る事を禁止するとも言っていない。

「だからよう、迷う事なんかねえんだよ！ ペアと携帯で連絡を取っても、違反にはならねえし、万が一違反だと言われても、聞いてねえって言えば済む事だ」

確かにそうだ。でも、そんな大事な事、なんで俺だけに教えるんだ。

「疑問が顔に出てるぜ！ なんで教えてるかって言うと、取引したいんだよ」

「取引だつて？」

「ああ、実は、此処の部屋にある食料や飲み物は、量に制限があるんだが……」

「なるほど、そういう事か、それで、取引なら、何をくれるんだ」

「コレさ！ 持っていれば、取引にはならねえがな」

こ、これは……。

「分かった。アルコール類は、全部あんにあげるよ！」

「ありがてえ！ タバコは吸うか？」

「いや、それも持って行って良い！」

「ビンゴだな！ 部屋に入る前に、酒呑んでなかったのは、お前だけだったから、もしかしたらと思っただが、良かったぜ。また、支給されたら来るからよろしくな！」

「ああ、分かった」

開城さんが、排気口に戻って行く。開城さんが、アルコール類とタバコの代わりに 俺にくれたのは、携帯の充電器だった。コンビニに売っている全メーカーに使えるキットがついているやつだ。

これで、充電の残りを気にしないで、メールのやりとりが出来る。待てよ！ 日向井さんは、充電器を持っているのか？

持っていないければ、意味がない。

「アドレスを見ました。最初のゲームマジヤンだけど大丈夫？ 開城さんから充電器貰ったけど、持ってる？」

メールを送ってみた。

メールが返ってきた。

「大丈夫です。今説明書を読み終わりました。理解出来ましたから心配しないで下さい。充電器は、内海さんからアルコール類とタバコと引き換えに貰いました。最初のゲーム頑張りましょう！」

そうか、内海さんと開城さんはよく似ている。もしかしたら、兄

妹かもしれない。

とにかく、少し安心した。ま、待てよ……理解したって事は、今までやった事が無いって事か…ふ、不安が頭をもたげてきた。

それにしても用意の良いことだ。携帯の充電器を二つ持ってきているなんて、恐らく、開城さんと内海さんも連絡を取り合っている事だろう。

待てよ……もしかして、開城さんと内海さんは、最初からペアを組む事を決めていたのか。だとすると、用意周到なのも納得がいく。プロペアが、最大のライバルって事になる。

プロペアの二人がアルコール好きで助かった。でも、開城さんと内海さんは、俺たちペアをライバルだと思っていないのかもしれない。

他のペアは、連絡を取り合っているのだろうか。排気口を使えば、偵察する事も出来る。でも、何だか卑怯な気もする。

「戦略とは、勝つ為の基本である。敵に塩を送り、油断させるのもまた、戦略なり！」

「ウアアッ！」

作家ペアの多井さんが突然現れたので、ビックリしてしりもちをついてしまった。

「驚かせて、すまない！ 排気口の入り口が開いていたので失礼した」

いつのまに……気配を全く感じなかった。多井さんが、俺をマジマジと見つめている。

「奴も同じ事を考えたか」

「同じ事？」

「そうだ、戦いにおいて、一番怖いのは、得体の知れぬ者、つまりは、その能力が未知数である者だ。他のペアは、経歴などから大体の能力が分かる。だが、君たちペアに関しての情報は少ない。そこで、偵察に来たというわけだ。勿論、この私もそうだがな」

高笑いをしている。余裕なのか、それとも、これも戦略なのか。

「スマン、スマン、つい、可笑しくなって、失礼をした。ところで、君たちペアは、どのペアを警戒しているんだい」

「どのペアって、そう言われても、詐欺師ペア以外は、強敵だと思っし……」

「まあ、確かに、詐欺師ペアは論外だが、最初に脱落するのは、以外なペアかもしれないよ」

え？ 多井さんは、詐欺師ペアが最初に脱落するとは、思っていないのか。

「君は、顔に思っている事が、素直に出してしまうんだね。そのクセは、何とかした方が良くと思うよ」

またしても、表情を読まれてしまった。このままではマズい。

「二つ教えてあげよう。ひとつは、充電器をプレゼントしてくれたのは、油断させる為だ。もうひとつは、兵法いわく、弱点は最大の武器にもなりうる」

そう言い残して、多井さんは、排気口へと戻って行った。これ以上お客様が来ても困るので、入り口を閉めておこう。

そうだ、こんな時こそ、ペアを組んだ相手に相談してみよう。

「多井さんが来て、最初に脱落するのは、詐欺師ペアじゃないかも shouldn't と言っただけけど、日向井さんはどう思う？ 詐欺師ペア以外は、強敵だと思うし、俺たちが勝ち抜いていけるかな？」

これで良い。送信！

返事が来たようだ。

「私も最初に脱落するのは、詐欺師ペアじゃ無いと思います。そのペアには、このゲームにおいて、なくてはならないある経験が不足しているからです。それから、詐欺師ペアは確かに不利な立場に居ますが、油断してはダメです。全力で戦いましょう！」

自閉症か何かで、口が聞けないのかと思ったが、以外に強気なところがある。男の俺が励まされてばかりで、少々情けない。

どつちに転んでも、生活は出来るのだから、ここは、腹をくくってがんばろう。

「ゲーム開始五分前です。ゲームルームに入ってください」

アナウンスが流れた。いよいよだ！ 自分に気合いを入れてがんばろう！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8404y/>

---

ペア・プレイ

2011年11月28日04時02分発行